



<最近の更新内容>

2011年1月30日：小説内小説「悪魔を憐れむ歌」を追加しました。これにて完結です。ありがとうございました。

今後小説を書く際は、別の電子書籍として出版します。ご期待下さい。

<表紙画像>

Amedeo Modigliani作「Young Girl」（1918）です。

マリア様に見られてる

初めての電子書籍。何を書こうか迷った。ウェブ上で何回も文章を書いているし、新人賞に応募する小説もたくさん書いているのに、自分にとって初めての試みだから緊張して、書けなくなる。

書けなくなるのは、恐怖と不安があるから。書くことで何かを成し遂げたいという願望があるから。全て放棄することにした。すると、肩の力が抜けた。

僕は、全てをもう持っている。どこにも探しに行く必要などなかった。この場所に、答えはあったし、肩をいからせて、不安と緊張に包まれて、取りにいく必要のあるものは何もなかった。

そう思ったきっかけは、グーグルでマリア像を見つけたこと。三連休を利用して、家のインテリアとして、ヴィーナスの彫像を買いに行こうと思った。新宿の世界堂に行けば、デッサン用のヴィーナスの彫像を一万円以下で手にすることができる。美少女フィギュアを買って部屋に飾るより、よっぽどまじな買い物だと思った。グーグルで彫像を検索しているうち、マリア像にたどりついた。キリスト教の修道会のサイトで、マリア像を売っていた。他にもペンダント、彫像、十字架、様々なインテリアが販売されている。聖書では偶像崇拝が禁止されているが、宗派によっては許容しているところもあるようだ。特にマリア様の像は、人気がある。

最初はヴィーナスの彫像を探していたけれど、マリア像を見ているうちに、彫像を買おうとしていた自分があさましく感じられてきた。自分個人の美的欲望を満たすことに何の意味があるだろうか。マリア像は、2000年近く人々の心に慰めと慈愛の心を与えてきた。ミロのヴィーナス像も同じように、人々に美の気持ちを与えてきたろうが、僕個人は、ヴィーナスよりも、マリア像が放つ光に寄り添いたかった。それはインターネットのオンラインショップ越しに投げかけられる光だが、自分の気持ちは、美と調和よりも、美と寛容の心を求めている。

結局、三連休に彫像を買いに行くことはなかった。マリア像を販売しているショップは、職場のすぐ近くにあった。来週の土曜日、店に出かけようと思う。買うかどうかはわからない。買う気になる出会いがあったら、その日その時買うだけだ。

こうして買い物ができる余裕があるということ自体、大変ありがたいことだが、僕の周囲の人たちみんなが休日に買い物を楽しんでいるので、ありがたみがわからない。僕が今の世界で、というよりも、人類の歴史の中で、史上まれにみる豊かな生活を送っているとは、なかなか想像できない。テレビには時々、自分よりも豪遊している富豪の姿が出てくるし、自分自身生活に満足を感じていないせいだ。

飽くなき欲求とはもう別れを告げて、満ち足りることを覚えよう。僕は十分に豊かであり、経済

と思考の自由を手に行している。これ以上何を個人的に追い求める必要があるだろうか。いつまでも子どものままでいるのはおしまいだ。僕は今まで、たくさんの動植物を食べてきたし、物体を消費してきたし、世界にごみを生み出してきた。

必要なことは、自分が得ているもの以上をさらにさらにと追い求めることでなく、自分が得てきたものを還元することだった。持ち過ぎている。いろいろと知っているのに、知らないふりをするのはもうやめにしよう。

スーパーフリー変化

もう小説を書きたくないと思った。決まりきった約束事だらけの小説は嫌いだ。小説は本来、極めて自由な表現形式だ。

この小説を連載しているパブーでは、「純文学」が人気のキーワードとして表示されている。たいていの小説サイトでは、純文学は不人気だ。小難しく、高尚で、娯楽要素が少なく、読むのが退屈な純文学よりも、ネット上ではジャンル小説の方が読まれていた。パソコンの画面では、長文を読むのがきつい。自然と、純文学は嫌われる。けれど、こうした状況も、電子書籍の普及により、変わるのではないかとされている。電子書籍は、ノンジャンルの小説を読む価値を読者に思い出させてくれるだろうか。

キンドル売出し中のアマゾン、創業家も小説を読むのが好きだと言っている。ipadも電子書籍の普及に貢献するだろう。ipodの普及によって、音楽業界は音楽のダウンロード販売を推進せざるを得なくなった。インターネットの世界をさんざん小馬鹿にしてきた出版業界も、ネット上でのダウンロード販売に進出せざるを得なくなるだろう。スティーブ・ジョブズの創造的破壊力は偉大である。

純文学というと、なんだか極めて真面目で、純粹無垢で、超然として、人を寄せつけない雰囲気があるけれど、純文学こそ、極めて自由で、型破りな表現形態だ。純文学なんて呼ぶから、変な誤解が生じる。ジャンルのない小説。それこそ、何を書いても自由な言葉の塊。これこそ文学だ。

文学こそが全ジャンルを通関して、最強だと思う。純文学には変な約束事がたくさんあって、堅苦しくてしょうがない。電子書籍という表現形態は、自由だ。拘束が少ない。電子書籍こそ、文学の自由を加速する。ゆるゆるで、ぐだぐだで、何でもありで、全てのあしかせをとっばらった、自由で寛容的な表現の渦。それを書くために、肩をいからせる必要もなく、緊張する必要もなく、読まれるだろうかと不安に包まれる必要もない。ただただ、好き放題に自分の体と精神を伸ばしていく表現の渦。それこそノンジャンルの小説というものだ。みんな小説を勘違いしている。

いやいや、こう書いている自分こそ小説というものを大きく勘違いしているのではないだろうか。勘違いしているなら、勘違いしているままでいい。たった一つの確定的な真実などどこにもない。あるのは、誤解だけ。文学を読むということは、誤読でしかない。真正な解釈などできない。

僕がこうだと思う君は、本物の君ではない。僕はいつも君を誤解する。君も、いつも僕を誤解する。永遠にわかりあえないからこそ、わかりあおうとするぐだぐだの努力。それこそ文学だ。

僕はテレビゲームの企画の仕事をしている。と言っても、僕自身が企画を考えるわけではない。インターネット公募に送られてきた素人さんの企画を審査して、面白そうな企画を上に通すのが、僕の仕事だ。ゲーム企画の選考員というわけだ。

まあこれは小説の中の語りだから、僕は嘘をついているかもしれない。僕の本業は、18禁アダルトPCゲームのシナリオライターかもしれないし、政治家かもしれないし、警察官かもしれないし、葬儀屋かもしれない。僕の語りが嘘かもしれないという可能性を残しつつ、ここから先の話を書いて欲しい。

昨日、メールで送られてきた企画の中に、悪くない企画があった。ゲーム開発の素人さんが考えた企画だ。商業的に成功するかどうかはわからない。大勢の人の反感を買うかもしれない。しかし、昨日目を通した百個近い企画の中で、そのゲームだけは、やってみたいと思った。

ゲームのタイトルは、「六十億人殺人ゲーム」。プレイヤーは、世界人類六十億人全員を殺戮することを目的に、ただひたすら人を殺しまくるとというのがゲーム内容だ。

画面右下には、現在の殺人数が表示される。分母は六十億人。ゲームスタート時は、六十億分のゼロという表示。

ベッドから目覚めたプレイヤーは、一階におりて、キッチンで食事を作っている母親の脇に立つ。キッチンの棚から包丁を取り出し、母親の首にぶすりと突き刺す。母親が悲鳴をあげて、血を吹き出しながら床に倒れる。画面右下の数字が、六十億分の一に変わる。「六十億人殺人ゲーム」は、このように極めて悪趣味なゲームなわけだ。

母親の悲鳴を聞いてかけつけてきたパジャマ姿の父親を蹴り殺し、廊下に倒れこんで尿をもらしている制服姿の姉を刺し殺す。プレイヤーは自宅を出た後、朝の住宅街を歩く人々を殺していく。

もちろん公衆の面前で殺人事件を起こしては、簡単に警察に捕まってしまう。ただし、裁判が起きて、刑務所に入ったとしても、死刑にならないければゲームは続く。出所後、また殺戮を繰り返せばそれでいい。

まあ手っ取り早くゲームクリアを目指すには、政治家になることだ。最初は人類全滅を狙う破壊者なのだという本性をひた隠しにして、立派な大人を演じてみせる。人望と信頼を勝ち得て、選挙に立候補し、総理大臣にまで登りつめる。官僚、経営者たち、裏社会の支配層、自衛隊、様々な勢力をあの手この手で自分の味方にし、総殺戮体制を準備する。準備が整ったら戦争開始だ。自分の手を汚す必要はない。安全な作戦司令部から核爆弾の発射指示を出す。後は人類全体が連鎖的に殺しあって、絶滅するのを眺めていたらいい。

人類を絶滅させることは、この大量殺戮兵器満載の現代でも、意外に難しい。何しろ、人類はしぶとい。平和主義者だの、邪魔臭いのがたくさんいる。このゲームをクリアするには、最高の知力を結集して、人類絶滅のために死力を尽くす必要がある。

もちろん、オンラインゲームだから、プレイヤーであるあなた以外にも、人類絶滅を狙うプレイヤーはたくさんいる。彼らにとってあなたは、殺すべき標的の一つに過ぎない。プレイヤー同士の熾烈な殺し合いが始まる。戦いの間に、あなたはたくさんの人の涙と絶叫を聞くことになる。まあ人と言っても、ゲームの中のバーチャルリアルな非実在青少年たちだが。

この「六十億人殺人ゲーム」が面白いのは、誰かを殺した時、死んだ人間の友や親族が泣き叫ぶ点にある。恋人、子ども、家族、友人、みんな泣いて、怒りを顔にあらわし、殺人者のあなたに呪いの言葉を投げつける。遺族の子どもが復讐しに来ることもある。

たくさんファンを持つ有名人を殺した場合は、大勢のファンが集まって、葬儀が行われることもある。葬儀会場に劣化ウラン弾でも打ち込めば、大惨事になる。ゲーム内のニュース番組やゲーム内の動画サイトで、瓦礫の山となった葬儀会場の映像が何回も繰り返し放送され、あなたは史上最悪の破壊者の異名を得るだろう。

何故、六十億人全員を殺す必要があるのか。殺戮が必要な理由は、説明されない。プレイを進めると、理由が次第に明かされていくらしい。人類を絶滅させる理由を見つけられない人、納得できない人は、別に殺人にいそしむ必要もない。ゲーム内の世界は現実をパーフェクトに再現しているから、殺人とは無縁の日常生活を満喫することもできる。もちろん、オンラインゲームだから、あなたは絶えず人類絶滅を願う他のプレイヤーに攻撃されるリスクがあるわけだが、まあリアルの生活と、恐怖の度合いは大差ないだろう。

殺人をしたくないと思ったあなたは、殺人をとめるために、有志をつのって、殺人鬼たちを逮捕していくこともできる。ゲーム開発者は人類絶滅をゲームのクリア目標に設定したわけだが、創造主が示したあなたの生きる目的に参加するかしないのかは、プレイヤーの自由だ。創造主に反旗を翻し、殺戮を楽しむプレイヤーたち全員を説得できる論理を構築して、ゲームの世界を変えることもできるかもしれない。

六十億人の人類全員が死んでしまったらゲームオーバー。もちろん、プレイヤーであるあなた自身も死ぬ必要がある。子どもが生まれてこないように、地下に隠れて生き延びるレジスタンスがいないように、画面右下に表示される数字が、六十億分の六十億、達成率百パーセントになることを目指して、殺戮を続ける必要がある。もちろん、プレイ中に病死する人もいるし、新しい命も生まれる。世界人口はゲーム内でも秒単位で変動し続けるけれど、画面右下の数字は、いつでも正確に人類全体の数を表示してくれる。

さあ、殺戮を始めよう。いや、始めなくてもいい。死の行進に参加するのか、行進をくい止める対抗勢力となるのか、何もせず傍観しつつ、自分自身の人生を楽しむのかは、プレイヤーであるあなた自身の選択にかかっている。

僕はこの企画を読んで、すぐ気に入った。今日はこの企画と、世界中の人間がセックスし続けるゲーム企画の二作品を、上に通すことにしよう。もちろん二作品とも、すぐに却下されるだろうが。

（この物語はフィクションです。実在の人物・団体・歴史と関係するはずがありません）

さて、今日はお盆休み中に応募されたゲーム企画を紹介することにしよう。だいたい僕が悪くないと思ったゲーム企画は、上に通しても、すぐ却下される。その腹いせに、こうしてネット上でボツ企画を公表するわけだ。もちろん今日ここに発表する企画は、まだ選考にかけられていないから、上に気に入られて、商品化される可能性もあるが、まあ没になるだろう。世の中そう甘くはない。

今日紹介するゲームの題名は、「戦後復興」。ほら、もうタイトルを見ただけで売れないと思うだろう？

「戦後復興」は、戦争が終わった後の世界で、ゲームが始まる。プレイヤーは、敗れた国か、勝利した国か、どちらの国でゲームを始めるか、選択することができる。

勝利した国からゲームを始める場合、プレイヤーは、焦土と化した敵国に降り立つことになる。自分たちの国が投下した爆弾によって、敵国の首都は廃墟になっている。もちろんあなたの国の兵士もたくさん死んでいる。やりあった仲なのだから、嘆く必要はないかもしれない。

ゲームの舞台として、選択可能なのは、第二次世界大戦後の日本、ドイツ、朝鮮戦争後の北朝鮮、ベトナム戦争後の南ベトナム、イラク戦争後のイラクなどだ。

例えばマッカーサー元帥になって、敗戦後の日本を訪れ、日本復興を楽しむのも面白いかもしれない。

イラク戦争後のイラクは、自爆テロや宗教対立が相次ぎ、非常に高難易度になっている。

戦後復興がゲームの目的というのは、ゲームの開発者があなたに提示した一つの選択肢に過ぎない。やろうと思えば、敗戦国の自立、復興を支援することなく、国をめちゃくちゃにすることもできる。旧支配者層を全員死刑にし、企業と軍隊を解体し、男性は全員強制収容所に送り、女性全員売春婦にし、子どもは全員異国の地に転売する。現地の統治者には、極悪の独裁者をすえて、一国が崩壊する様子を楽しむこともできる。まあこれは最悪のやり方をプレイヤーであるあなたが選んだ場合の話だが。

もちろんそのような統治を行えば、マスメディアと国際社会がだまっていない。周囲からの批判をだまらせるために、あなたは金を世界中にばらまいて、共存関係を構築する必要があるだろう。

ようは、あなたの国と協力しなければ、自国の発展が保障されないような支配体制を築いてしまえばよいのだ。かつ、やりたい放題だととられないように、表向きは聖人君子の理想を掲げ、慈善活動や平和支援にとりくむ素振りをする。実にいやらしい大人の政治が、復興後の世界でも行われるというわけだ。

これは仮定の話だ。せっかくのゲームなのだから、最悪の統治を行いたいと、あなたが選択した場合の話に過ぎない。

好き好んで極悪非道の政治家を演じる必要はない。やりたければ、真に敗戦国の復興を願って、尽力することもできる。

全てはプレイヤーであるあなた自身の選択に委ねられている。あなたの選択が、一国の未来を決める。両肩に担った責任を全うすることで、あなたはゲームから非常な充実感を得ることもできるだろう。

敗戦国の側でスタートすることを選んだ場合、あなたは廃墟となった首都からゲームを開始することになる。原爆を投下された地方都市からゲームを始めることになるかもしれない。あるいは、仲間が全員自決している戦地がスタート地点かもしれないし、夫の帰りを待つ妻として、ゲームをスタートさせることになるかもしれない。

敗戦国の生き残りであるあなたの目的は、戦後復興だ。

もうあなたはわかっているだろう、「敗戦国の生き残りであるあなたの目的は、戦後復興だ」と言うのは、ゲームの開発者が提示したゲームの目的に過ぎない。あなたは開発者側が用意した目的には目もくれず、自分の好きなようにゲームを進めることができる。戦後の荒廃した環境で盗みと殺戮を繰り返してもいいし、自国を見捨てて、世界に羽ばたいてもいい。「戦後復興」では、何もかも、プレイヤーであるあなたの自由なのだ。

開発者が提示するゲームの目的が、最善の選択というわけではない。よりくだらない人生を送るのか、より最善の選択を見つけるのかは、プレイヤーであるあなたの選択次第だ。

小説は表現として極限までたどりついたのに、何故あいかわらず古臭い方法で小説が書かれ続けているのか。それは小説が伝統芸能化したためである。そんなにファンがいないジャンルならば、伝統芸能になる以前に小説は滅びていただろう。けれど、小説を愛するファンはたくさんいたから、小説は伝統芸能として存続した。上質な作品は生まれ続けるだろうが、ジャンルの極限まですでに到達しているのだ。あまり発展することはないように思える。なら、何故僕は小説を書くのか。伝統芸能として上質の小説を書くためか。それとも、何か革新をなすためか。

革新なんてできやしない。全ては何かのコピーになってしまう。遺産相続しかできない。小説以外の別の新分野で何かをやろうとしても、結局「自己表現する」という活動をするにかわりない。

自己表現。なんと手垢のついた言葉だろう。みんながみんな自己表現ばかりしているから、世界経済がうまく回らないと言えるだろうか。

僕はもう自己表現なんて一切やめて、他者表現もやめて、表現をあきらめよう。そうだ、何も表現できない。そのかわりに、過去表現されてきたものを全て無効化することにしよう。ジョイスやベケットやヌーヴォーロマンがあるというのに、小説を書けるはずもない。けれど、世界には伝統芸能化した小説が溢れている。伝統芸能となった小説が、ヌーヴォーロマン以降も書かれ続け、読まれ続け、消費され続けている。僕たちも伝統芸能に参加するのか。違うだろう。伝統に抗うのだろう。逃げ続けるのだろう。飛び続けるのだろう。破壊し続けるのだろう。

小説に約束事は一切ない。何を描いても許されるし、何を考えても許される。何故ならそれは、小説に過ぎないから。伝統芸能ではない、こりかたまった伝統から解放された新しい虚構だから。

どこまでも逃げ続ける。何も生み出さない。

小説の伝統芸能化に対抗するために、何が必要か。伝統芸能と化した小説を書くのをやめて、読むのもやめてしまえばいい。違うのだ、欲しているのは、今ある概念から別の概念に逃走するための新しい言葉なのだ。

僕は走って逃げる。理解されたくはない。理解される瞬間に、理解から逃げる。

理解された瞬間、僕は僕自身でなくなる。

僕は、理解された彼にとりこまれて、彼の思考の中で生きることになる。彼が理解した僕とは、彼が接した僕の一部に過ぎない。僕を完全に理解することは、僕自身にも不可能だ。

どんどん走って逃げたらい。どこに？ 世界に果てはない。全てが計測されている。計測されていない世界などない。ならば計測不可能な世界を作り出せばいい。そこに逃げ込めばいい。誰も理解できない世界に。

それだけでは駄目だ。みんなが理解していると思いつこんでいるものを徹底的に解体する必要がある。その完成体は、いろんなものを排除しているからだ。完成しているふりをしているけれど、そいつは絶えずいろんな汚物を世界に放り投げている。

汚物の側から世界の内側にもう一度戻ろう。そうしたら、世界を泥で塗り固めることができる。

（この小説はフィクションです。実在の戦争、ゲームと関係するはずがありません）

よくあるオンラインのFPSゲームで、ある新しい試みが行われているという噂を耳にした。FPS（ファースト・パーソン・シューティング）とは、戦場の兵士となって、プレイヤー同士で殺しあうゲームである。噂に聞いたFPSゲームでは、兵士でなく、医者や平和活動家として、戦場を生き抜くことができるそうだ。

他の多くのプレイヤーは、普通のゲームみたく、戦場で殺しあっている。特殊部隊同士が熾烈な銃撃戦を繰り広げている中、医師となって、負傷者の治療に当たるのだ。

銃撃戦の過程で民間人に重傷者が出るかもしれない。爆弾やバズーカ砲も使われるのだ、民家も破壊される。傷ついた兵士、老人、子ども、女性を助けるのが、医師としてゲームに参加したプレイヤーの目的となる。

医師だからといって、兵士が見逃してくれるわけではない。ルールが軍隊よりゆるいオンラインゲームの世界だ。兵士たちは、殺戮の喜びを味わうために、あるいは、戦闘に邪魔だからという理由で、医師であるあなたに銃口を向けてくるかもしれない。

兵士のプレイヤーと違って、あなたに武器はない。持っているのは、治療器具だけ。走って逃げるか、あるいは、戦場に落ちている死んだ兵士の武器を手にとって、自己防衛を行うか、選択は、プレイヤーであるあなた次第だ、という噂だ。

平和活動家としてプレイを開始した場合、戦場となった街や村の住民に食料や衣服を届けるのがプレイの目的になる。医師プレイヤーとの連携も必要だ。

コンピューターが動かしているNPCのテロリストを、兵士のプレイヤーたちは殺害しようと街にやってくる。誰がテロリストなのか見分けがつかないから、兵士たちはテロリストではない一般市民も次々と殺していく。平和活動家となったあなたは兵士たちの横暴を手持ちのデジタルビデオカメラで撮影し、ゲーム内のインターネットに公開することもできる。一般市民が大量に殺されていると世界に知れ渡れば、戦場の平和レベルがあがる。

あなたが手に持っているカメラを特殊兵器と勘違いして銃を撃ってくる兵士のプレイヤーがいるかもしれない。あるいは、あなたが単に目障りだからという理由で撃ち殺そうとする兵士もいるかもしれない。過酷な状況で、生き抜き、かつ武器を使わずに平和を広めるのが、平和活動家としてゲームに参加したあなたの目的となる、らしい。

平和活動家のグループのリーダーとして、兵士やテロリストのリーダーと交渉する場面も用意されているという。武力衝突を回避するには、金が必要になるし、宗教や民族の対立を緩和する為、話術と地道な活動の継続が必要だ。戦場には、殺し合いによって生じた憎悪が渦巻いている。殺そうと思ったわけでないのに、誤爆で亡くなった人もたくさんいる。武器を使って殺しあうより、話し合って平和を構築する方がはるかに難しい。

このゲームの噂を聞いてからというもの、グーグルで検索し続けているが、なかなかそれらしいゲームが見つからない。ツイッターで何個が噂の書き込みを目にしたが、ゲームがどこにあるかはわからない。今度うちの社長にも聞いてみよう。

2010年12月6日：グローバル市場で生きることの考察

現代社会に生きていくと、体が疲れてくるし、頭が痛くなってくるけれど、心身ともに健康でありたい。今生きようとするなら、地球規模に拡大したグローバル市場で、競争に勝っていく必要がある。何も世界1位になって、圧倒的強さを見せ付けて勝利する必要はない。自分の生存を確保すること。それだけでできれば十分だ。

ならば、僕はもう自分の生存を確保できているのではないか。衣食住に満ち足りている。けれど体も頭も痛い。何かを求めているから、そうなるだけだ。よりよい生活。より自分が望む仕事。それを求めているかぎり、僕は疲労し続ける。何もグローバル競争市場で戦う必要はない。生きていく居場所を確保するだけでいい。それなら愛も権力も自尊心も不要だ。衣食住さえあればいい。求める必要はないのではないか。本当はいらないものばかり求めていたのではないか。

必要なものだけを求めて、必要なことだけを書き留める。近代は、必要でないものを欲望させることで、経済を維持してきた。必要なものだけを求めるなら、こんな今みたく働き続ける必要もない。毎日遊んで暮らしていてもよい。

必要なものも本当は、一つもないのではないか。全て、満たされているのではないか。

僕は全て満たされている。満たされている上で、何か不要なものを自由に創造している。

そうだ、近代も、全ての人は満たされているという前提で、不要な商品を次々と作り出していた。しかし、多くの人は満たされていなかった。みんな衣食住には満ち足りていたけれど、心も体も満たされていなかった。近代が提供する広告商品を買いつけて、欲望を充足させたが、怒りと不安と悩みは解決されなかった。

新しいものを創造する必要はない。まず、満ちる必要がある。自分一人だけで、まず満ちてみる。それから後は、ひたすら静寂を作り続けること。何も語る必要はない。何も音を作る必要はない。何も生み出さず、何もなさず。

それじゃただ単に老子じゃないか。千年以上前に語られたことを反復しているだけじゃないか。

2010年12月7日：我慢と忍耐の違い、ヤコブの手紙

昨日は20世紀初頭の作家みたいな文体を意識して日記を書いてみたけれど、あの文体で文章を書くとしても、憂鬱な感じになる。時代の空気を反映しているのか何なのか。文章にはモードがある。あるモードで文章を書いていると、文章を書いている時以外の日常生活まで、そのモードに支配されてしまう。できるだけ明るいモードでいたい。

外に持っていった本を読み終わったから、iPodで久々に新約聖書の朗読を聴いた。ヤコブの手紙の朗読だ。朗読を聴いていたら、病的症状がおさまった。

「私の兄弟たち、いろいろな試練に出会う時は、このうえない喜びと思いなさい。信仰が試されることで忍耐が生じるとあなたがたは知っています。あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります」

グローバル市場で生きることは試練だ。この試練を悲観するのか、忍耐するのか。忍耐は、我慢とは違う。忍んで耐える。我慢という言葉には、自己にとらわれている感じがする。我慢は元々仏教用語だった。元の自己にとられる意味が転じて、我慢は忍耐と同じような意味で使われるようになったが、我慢している人と、忍耐している人の心情は大きく異なると思える。我慢している人には憂鬱や葛藤がある。忍耐している人にも葛藤はあるが、憂鬱心は少ないはずだ。耐え忍んで、次を待っている気持ちは、忍耐している人の方が強いはずだ。

グローバル市場競争の不幸が自分に迫ってくるとする。我慢する人は、憂鬱になり、自己憐憫の気持ちに襲われる。自己責任で、自分の力で解決しようとする人は、状況を打開できるかもしれないが、同じように苦しんでいる人の力にはなりにくい。自分と同じように苦しんでいる人はいないのでないかと想像できる人は、自分と同じように苦しんでいる人たち全員を救う方法がないか考えるだろう。常にそういう方向で、考えていきたい。

自分だけを哀れに思うのでなく、自分だけ助かるのでなく、社会を変えることで、苦しむ人たちみんなが助かる方法を探究すること。これが僕にとっての仕事になるだろうか。僕は仏教徒でもキリスト教徒でもない。神や宗教の違いを超えて、無宗教の人にも妥当する言葉を作っていきたい。

2010年12月7日：ストイックからギークへ

昨日は真面目に生きようと思っていた。けれど、今日また新約聖書の朗読をiPodにきいているうちにそんなに忍耐してばかりの人生、鬱屈になるんじゃないのと思った。忍耐なさい、試練を耐えなさい、新約聖書では何度も出てくる。ニーチェが指摘したように、新約聖書はルサンチマン、弱者の哲学だと意識せざるを得ない。

やっぱり仏教的に生きるのがいいかというと、そうとも思えない。新約聖書と仏教の教えをかけあわせて、「ただ一人犀の角のように歩みつつ（仏教）、汝の隣人を愛しなさい（新約聖書）」としたらどうだろうと、以前考えていたことを思い出した。さらに思考は進む。やっぱり今はグローバル競争時代。真面目に生きている人、ストイックに生きている人は日の目を見ないのではないか。ストイックにある特定ジャンルの技芸の熟達に励むことは、変化の乏しい時代なら最適戦略だろうが、変化の激しい時代では、すぐ時代遅れになってしまう。競争と変化の激しい時代には、一人とじこもって努力する姿はふさわしくない。集合知の働きを利用したらいい。ゆったりまったり、ギークの思想だ。

がむしゃらにがんばらず、専門的な知識を生かして、知恵と知識と戦略と戦術を楽しむ。専門的知識に固執するのでなく、知識を楽しむ姿勢がギーク的。

好きなものに取り組み、嫌いなものは嫌いだとはっきり言う。嫌いなものには近寄らない。小宇宙世界の乱立だと言われてもかまわない。昔はマスメディアが「総合情報」を大衆に垂れ流していた。グローバル世界には、大衆なんていうもの存在しない。みんなの趣味、価値観は多様化している。多様化した世界に対応するには、集合知の働きを利用したらいい。

自分だけの力でやろうとせず、集合知の働きを利用しつつ、世界の変化を楽しむ。できるだけ大勢の人の力を借りる。例えば小説について話すと、わけのわからない新人の書いた小説なんて、よっぽど刺激的な内容じゃないと、読む気がしない。小説なんてネットの時代、誰でも書いて発表できる。ギークならどうするか。集合知を利用すればいい。他の作品にのっかる。他の優れた手法にのっかる。みんなの意見を聞きながら、意見の変化を分析しながら小説を書いていく。こうしたポストモダンの手法は20世紀中葉以降も見られたけれど、今ならリアルタイムに、出版社の力を頼らずに個人で集合知的な小説の創作ができる。

何故みんな小説を書けるようになったのか。集合知が情報環境を用意してくれたのだ。パソコン、ネット、ブログ、ツイッター、電子書籍、みんな誰かがプラットフォームやソフトを用意してくれた。それらを安い料金で利用することができる。ギークなら、自分の殻に閉じこもらず、集合知的な知識と技術を駆使して、ゆったりまったり世界と対話したらいい。

戦う必要はない。ストイックになる必要もない。ポエムになる必要もない。そういうエゴイスティックな振る舞い、集合知の時代にはふさわしくない。今は、個人のエゴで世界は動いていない。集合知にのっかること。集合知にはいろんな問題があるけど、利用しつつ、共存すること。集合知と共栄って言葉の方が、大時代的だけど、僕の今言っていることにふさわしいのかな。とりあえずそういうこと。今の時代にイエスやブッダと同じ振る舞いをしたら、キモい人かカルトになってしまう（笑）。笑いが必要。笑う余裕。ギーク的な世渡り。

ギークって何？

日本でいうところの、オタクです。今日の発見で、鬱的症状から少し回復。

小説内小説「悪魔を憐れむ歌」

僕は悪魔三匹を殴った。

僕の部屋には悪魔が三匹いる。僕は悪魔を殴り、蹴飛ばし、血まみれにしてやった。

悪魔たちが泣きながら、僕に許しを請う。許すはずもない。僕は再び、悪魔の顔を蹴飛ばす。悪魔の口から血しぶきが飛ぶ。

薄汚い悪魔どもめ。死ね。

何発も、何発も、悪魔を殴る。一匹は死んだ。こうもりの翼は折れ曲がり、床には血だまりができています。蹴飛ばしても反応がない。残り二匹は部屋の隅に寄り添って、怯えた顔で僕を見ている。

どんなに許しを請おうが、僕は許さない。三匹の悪魔は、僕の妻と娘を殴り殺したのだから。

悪魔三匹にとどめを刺そうとした時、部屋のバルコニーから天使が舞い降りた。白い羽を持つ金髪美少女、裸の天使だ。

「憐れな人間よ、それ以上悪魔に暴力を振るうのはやめなさい」

「うるさい。こいつらは僕の妻と娘を殴り殺したんだ。人間の法では、悪魔を裁くことができない。僕が私刑を加えている。邪魔するな」

「人は何人も裁くことができない。裁くことができるのは、天におられる我らが主のみである」

「ふざけるな。お前は自分で自由に考えることができないのか。誰かが創った命令文に従って行動しているだけだろう」

「人の子よ。それはお前とて同じこと」

裸の天使が僕に殴りかかってきた。

僕は身を横にひねった。ダメだ。天使の腕が伸びてくる。天使のパンチが僕の頬を殴り飛ばす。僕は口から血を吐いて、フローリングの床に倒れた。

「人の子よ、生きることそのものの罪と暴力性を自覚しなさい」

天使が何度も僕を素足で踏みつける。振り上げられた彼女の細い脚が、僕の全身を叩きのめす。脚で踏まれる度、僕の口から血の泡が湧き出てくる。

「やめろ、殺すつもりか」

「殺しはしない。罪をあがなう覚悟はできたか」

「何が罪だ。悪魔三匹を殺すまで、僕は死ねない」

天使は僕を踏むのをやめた。

「この鏡をのぞくがよい」

天使が僕の目の前で、手のひらをひろげた。天使の手のひらの中心に、一つ目があった。一つ目の瞼が開く。瞳から映像が飛び出してくる。

映像の中に、女の悪魔と子悪魔がいた。悪魔たちは、肉にかぶりついていた。

「あの悪魔たちが食べている肉は、何の動物の肉だと思う？」

「知るか」

「人間だよ」

天使がささやいた。

「そして、あの肉を食べているのは、お前が殴った悪魔の妻と娘たちだ」

「それじゃあまさか、あいつらが食べている肉は・・・」

僕は信じたくなかった。悪魔が妻と娘を殴り殺したのは、ついこの前だ。二人の死体は隣の寝室にある。まさか二人が食べられているはずもない。

しかし、天使が見せている映像が、現在の映像とは限らない。未来の映像を見せているとしたら、悪魔たちが食べているのは、僕の家族かもしれない。考えたくもないことだ。

天使は慈愛の笑みを浮かべている。悪魔たちが食べているのは、誰か見知らぬ人間の肉だと信じていたい。

「安心しろ。悪魔たちが食べている肉は、お前の妻と娘の肉ではない。あの肉はね、……お前自身の肉だよ！」

天使が高笑いを始めた。

「嘘だ。僕を苦しめるためにそんな嘘を言っているだけだろう！」

「天使は真実しか述べない。天使が嘘をついたら、地獄に落ちてしまうんだよ！ お前ら人間はどれだけの牛と豚と鳥を食べてきたか知っているのか？ お前ら人間だけが動物の肉を食べていたわけではないぞ。お前らは霊長類などではない。お前ら人間の肉は、悪魔が食べているんだよ！」

天使の手のひらに光輝く剣が現れた。

「死ね、罪を償え」

光の剣が振り下ろされる。僕は絶叫した。

．．．

目覚めると、僕の横には妻が寝ていた。ゆりかごには、娘もいる。二人とも生きている。僕も生きている。

「どうしたの？ 突然叫び出して」

眠っていた娘も、僕の絶叫に驚いて泣き始めた。

「すまない。悪い夢でも見ていたようだ」

僕はベッドから起き上がり、リビングに向かった。悪魔も天使もない。退屈な日常性は確保されている。

テレビをつけてみる。牛の口蹄疫が出た地方で、今度は鳥インフルエンザが発生したという。テレビのインタビューに答える現地の方は、呪いではないかと口にしていた。科学的に考えれば、口蹄疫とインフルエンザの発生に因果関係はない。しかし、人は二つの無関係な現象が偶然続いて起きた時、そこに因果関係を見出したくなる。人は原因を求めてしまう。

水を飲み終えた僕は、キッチンでコップを洗った。寝室から妻の悲鳴が聞こえてきた。寝室に走る。寝室には悪魔が三匹いた。

（了）

『ホスピタリティ』
—これで、おしまい—